

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 23 日現在

機関番号：12601
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：22520229
研究課題名(和文) イギリス・ロマン主義時代とグローバリゼーション

研究課題名(英文) British Romanticism and Globalization

研究代表者

アルヴィ なほ子(宮本なほ子)(Alvey(Miyamoto), Nahoko)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：20313174

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、18世紀後半から19世紀前半の海外覇権への道を進む中で様々な「他文化」を国の内外に抱え込むことになったイギリスが直面した諸問題を、グローバリゼーションの初期の形態が孕んだ問題と捉え、ポスト・コロニアリズムの現代との相関性を考察した。植民地拡大に伴って、商品化、商業化される「自然」と「文化」の現実とせめぎあいの過程を、イギリス・ロマン主義の詩人(Coleridge, Shelley, Keats)、画家(Earle, Lewin)の焦点をあてて、作品化/商品化された未知の非ヨーロッパ的空間とヨーロッパ人との関係が現代のポストコロニアルな状況を先取りしていることを具体的に示した。

研究成果の概要(英文)：This project examines the problems in which the British Empire was enmeshed in the first half of the nineteenth century when she was paving the way to imperialism and facing various "other s"("other cultures") in the homeland as well as colonial outposts. It considers these early nineteenth-century problems as caused by an emergent and early form of global movement that covers political, economic, and cultural spheres and which we now term globalization. By focusing on significant cases provided by S.T. Coleridge, P. B. Shelley, John Keats, Augustus Earle and John Lewin, the project discerns an important relationship between the problems the age of British Romanticism as involved in and those we are facing in the modern post-colonial age, and furnishes some useful hints to those problems by scrutinizing the processes in which "nature" and "culture" were (de)mystified, commercialized and commodified in the encounter between European and non-European cultures.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：ロマン主義 イギリス グローバリゼーション シェリー アール

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、2007年、「大西洋の両側」をまたがる最大のイギリス・ロマン主義の学会北アメリカロマン主義研究学会(NASSR: North American Society of the Study of Romanticism)の年次大会“Romantic Diversity”(「ロマン主義的多様性」)に参加し、ラブラドル植民地がシェリー(Percy Bysshe Shelley)の作品の中でどのように表象されているか、その歴史的意義をジャン＝ジャック・ルソーの思想とも関連させて発表した。その時に、イギリス、アメリカの研究者たちは、イギリス・ロマン主義、ヨーロッパ・ロマン主義の地域的枠組みを越えても、“transatlantic”、つまり、大西洋をはさんだ旧大陸ヨーロッパと新大陸アメリカという形での横断、あるいは、よりヨーロッパに近い「東洋」である中東に目を向けがちであることを痛感し、地球規模での「多様性」の研究を発進させる必要性を感じた。文学・文化研究におけるイギリス・ロマン主義がこれまで見落としていた地域について、非ヨーロッパ、非英語圏の文化に身をおく、イギリス・ロマン主義研究者というアイデンティティを、自己の研究分野に活かさないかと考えるに至った。こうして、英米の従来の研究ではあまり検討されていなかった地域とイギリス・ロマン主義の関わりを「自然」と「文化」の移動と変容という観点から詳細に吟味し、この時代に胚胎していたグローバリゼーション、コロニアリズムの諸問題と多文化の共生との複雑な絡まりを歴史的に同定し、かつロマン主義の現代的な新しい意義を見出せないかと考えるに至った。

2. 研究の目的

イギリス・ロマン主義の文学テキストがいかにヨーロッパを越えた「世界」とコロニアリズムの問題を時代に先駆ける形で考えていたかを具体的に示すことを目的とした。イギリス・ロマン主義の時代である18世紀後半から19世紀前半、イギリスは、海外覇権への道を進む中で様々な「他文化」を国の内外に抱え込むことになり、様々な問題に直面した。このことを踏まえて3つの目的を設定した。

- (1) これらのイギリスが直面した諸問題を、グローバリゼーションの初期の形態が孕んだ問題として捉え直す。
- (2) 現代のポスト・コロニアリズムの時代との相関性を示す。
- (3) 多様な文化的背景を前提とする21世紀にふさわしい文学研究のありかたを提示する。

3. 研究の方法

ヨーロッパの植民地拡大に伴って、商品化、商業化される「自然」と「文化」——海を越えて専門的に輸送・移植される動植物、移動・移住する様々な民族の人々——の現実とそれが新しい国と言葉に移植されていく過程を3つのやり方を複合的に用いて検討した。

- (1) 一次文献を丁寧に精査し、今まで等閑視されていた非ヨーロッパ圏へのイギリス・ロマン主義の同時代的な影響を明らかにする。
- (2) 現代の文学理論、ポストコロニアル批評、イギリス・ロマン主義研究の二次文献を用いて、(1)で明らかになった知見を現代の文学・文化批評の枠組みに入れて現代的な意味を探求する。
- (3) 国内、国外の学会で発表し、資料、研究方法などについて、研究者からのフィードバックを受け、それを活かして研究を進める。

4. 研究成果

本研究は、18世紀後半から19世紀前半にかけて、ヨーロッパの植民地拡大に伴って、ヨーロッパを越えた地域の「自然」と「文化」が商品化、商業化された過程、動植物、人が移動・輸送・移植・移住した過程を検討し、「他文化」の流入と変容の過程とその歴史的意義を問うものであり、3つの課題を明らかにした。

- (1) 政府の認可を持った使節・調査団と現地の「自然」・「文化」との邂逅と非ヨーロッパの文物の移送、それがイギリス・ロマン主義の時代の想像力にもたらした影響について、2つの観点から研究を遂行した。特に、イギリス・ロマン主義の時代はイギリスの植民地主義の政治・経済活動メタファーとなったジャワ島に生息する毒性を持つ植物「ウパス」のイメージ、コールリッジ(Samuel Taylor Coleridge)の「クブラ・カーン」(“Kubla Khan”)によって歓楽宮のイメージとして定着した「ザナドウ」(清朝の夏の首都上都を指すと考えられている)のイメージの背後にある、今まで調べられてこなかった歴史的背景を一次資料を用いて明らかにした。すなわち、18世紀初めにロシア使節団の随員として清朝の夏の離宮を訪れた最初のイギリス人以降、陸路で清の首都に入る計画を持っていたイギリス東インド会社とイギリス本国政府の対応、一般国民の持った「中国」、「ザナドウ」のイメージの複雑な関係を明ら

かにした。

- ①ジャワの「毒の木」のヨーロッパの科学、文学への影響、特にエラズマス・ダーウィンのウパスのイメージが政府の植民地官僚のみならず、科学者、一般人の想像力に与えた影響。
- ②イギリスの清朝への使節団とコールリッジの「クブラ・カーン」(“Kubla Khan”) の関係を中心に示した。

(2) ロマン主義の時代の後半に、上記(1)で扱ったような公式の資格を持った訪問使節ではなく、フリーの立場で海外に行くことができる人々が出現した点に注目し、フリーランスの芸術家が公的な立場とは違う地平から異文化と邂逅した時の衝撃、それを本国にどのように伝えたか、あるいはそのような他文化との邂逅を可能にするため、異文化との邂逅を商品化して渡航資金を作るどのような芸術活動の仕組みを作ったかをオーガスタス・アールの例を使って示した。

- ①公式の訪問使節の一員が残した資料と政府との関係を持たず初めてご大陸をフリーランスの資格で訪れたアールの作品との比較。
- ②アールのフリーランス的な立場の特徴をより明らかに示すために、オーストラリアで最初の職業画家となり、新しい植民地に定住して現地に根をはろうとしたジョン・リーウィンとの比較によって、南半球の「コロニー」独自の文化の萌芽と19世紀初頭のイギリス・ロマン主義やイギリスの政治・文化状況の複雑な絡み合いを明らかにした。

(3) イギリス・ロマン主義的な想像力が東洋の表象と分かちがたく結びついている現象を示しインド的表象を例に検討し、そのような東洋的な部分を内包したイギリス・ロマン主義的想像力の影響が19世紀末以降にイギリス・ロマン主義が伝播した東洋で受容された時にどのような創造的変容を辿ったかをシェリーの作品とシェリーの作品に影響を受けた島崎藤村の作品で示した。

以上の点から本研究は、イギリス文学、あるいは文学という狭いジャンルを超えて、学際的にイギリス・ロマン主義の時代を捉え直し、その独創的な学問的貢献は、以下の4点にある。

- (1) 国境・海を越えた「自然」・「文化」の移動と変容を商業化、政治との絡まりに焦点をあてたこと
- (2) ロマン主義の時代の前半の、「自然」・「文化」の輸送の担い手、つまり政府に公式に派遣された使節団や政府の認可によつ

て編成された調査・探検団の性格と、時代の後半になって初めて出現するフリーランスの画家・作家・ジャーナリストと対比させたこと

- (3) オーストラリアに骨を埋めたリーウィンとロンドンに戻ったアール、博物学的関心から描かれたリーウィンの作品と報道ジャーナリスト的側面を持ったアールとの違い、アールのニュージーランドを描いた作品とオーストラリアを描いた作品の違い(マオリとアボリジナルの書き方の違い)など両者は対照的な点が多々あるにもかかわらず、また本格的に研究がされていなかったこの二人の画家の核心を捉え、19世紀前半のイギリスの文化的グローバリズムの側面を示したこと
- (4) イギリス・ロマン主義の詩想/思想自体のハイブリッド性とそれが影響を与えた非ヨーロッパの想像力のハイブリッド性の比較

本研究の国内外での位置づけは、イギリス・ロマン主義のオリエンタリズム研究に新たな視点を提供したことで、今まで研究が進んでいなかったこの時代の地球規模での多様性を以下の2つの点で新たに示した。

- (1) イギリス・ロマン主義時代のグローバルなネットワークの構築の有り様を示したこと
- (2) 他者との邂逅とその影響の複雑な伝播のあり方を東南アジア、南半球を中心に示したこと

以上より、イギリス・ロマン主義時代研究に多大な貢献を行ったと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

1. Nahoko Miyamoto Alvey “ ‘Kubla Khan’ and Orientalism.” *Grasmere 2010: Selected Papers from The Wordsworth Summer Conference* (Ed. Richard Grivil. Penrith: Humanities-Ebooks) 査読有 2010. pp. 77-100.

[学会発表] (計 3 件)

1. Nahoko Miyamoto Alvey “Percy Bysshe Shelley and Japan’s Anxiety of European Influence.” *Global Romanticism Conference, Romantic*

Studies Association of Australia (RSAA) second biennial conference. 4 July 2013. University of Sydney, Australia.

2. Nahoko Miyamoto Alvey “A Wild Surmise’: Romantic Encounters with the Pacific.” *Imagining the Pacific, Imagining Australia* 27 July 2012. CPAS (Center for Pacific and American Studies, University of Tokyo).
3. Nahoko Miyamoto Alvey “ ‘Kubla Khan’ and Orientalism.” 4 August 2010. *The 40th Anniversary Wordsworth Summer Conference.* Grasmere, UK.

[図書] (計 1 件)

1. アルヴィ宮本なほ子「この天来の小品」—シェリーの「インド風セレナード」再考 彩流社、『揺るぎなき信念』(新見肇子、鈴木雅之篇)、2012, 466pp. (195-209)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

アルヴィ なほ子 (宮本 なほ子) (Alvey Nahoko (Miyamoto Nahoko))

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：20313174